

通巻 63 号 December, 2024

## 日本通信教育学会報

Japan Association of Distance Education

## 目 次

・ 第 72 回研究協議会を終えて . . . . .	1	・ 会員 . . . . .	5
・ 開放制教育の原点—村井実先生を敬慕して . . . . .	3	・ 会員の声 . . . . .	6
・ 『研究論集』 投稿募集 . . . . .	4	・ 通信教育の動向 . . . . .	7
・ 第 5 回研究交流集会の開催／理事会報告 . . . . .	4	・ 通信教育のこの一冊⑯ . . . . .	8

## 第 72 回研究協議会を終えて

2024 年 11 月 2 日（土）、Zoom によるオンライン形式および桜美林大学千駄ヶ谷キャンパスにて、日本通信教育学会第 72 回研究協議会が開催されました。参加者数は 51 名（会員 30 名、非会員 21 名）でした。研究協議会終了後には情報交換会が行われ、24 名が参加し、今後の学会活動について意見を交換するなど、盛り上がりました。

研究協議会の午前の部は、鈴木克夫会長（桜美林大学）が「村井実先生と通信教育—会長挨拶に代えて」の題目で、令和 6 年 10 月 18 日にご逝去された村井実先生（102 歳）への黙祷と追悼の挨拶を行いました。村井実先生は「閉鎖制」から「開放制」の教育体制へという教育思想のもと多くの論考を残され、また、慶應義塾大学通信教育部長や私立大学通信教育協会設立に尽力されるとともに、本学会会長も務められました。鈴木会長からは、日本の通信教育の発展に対する村井先生の多大な貢献が語られました。挨拶の後、自由研究発表 3 件が行われました。総会・昼食・休憩の後に行われた午後の部では、自由研究発表 2 件とシンポジウムが開催されました。司会は澁川幸加（中央大学）が務めました。以下に当日の発表内容の概略を報告いたします。

## 【自由研究発表】

加藤圭太会員（早稲田大学大学院／愛知県立旭陵高等学校）からは、「NPO に頼らない『校内居場所カフェ』の持続可能な運営に関する試行的検討」の題目で、保護者により運用されている公立通信制高校内における校内居場所カフェの持続可能な運営を支える要因について研究発表がありました。

山田千春会員（札幌大谷大学短期大学部）からは、「広域通信制高校とサテライト施設の子備的検討」の題目で、通信制高校の前身組織による広域通信制高校の分類、広域通信制高校のサテライト施設の数と種類、広域通信制高校の生徒募集の範囲に関する調査結果が報告されました。

山鹿貴史会員（小田原短期大学）からは、「保育者養成通信教育における ICT 教育の現状と課題」の題目で、保育者養成を行う短期大学通信教育の科目「情報機器の操作」で用いられている教科書並びにシラバスを分析し、保育における ICT 教育の指導実態を検討した結果が報告されました。

田島貴裕会員（小樽商科大学）からは、「通学制大学における遠隔教育の活用方法—学修者本位の大学開放へ向けて」の題目で、小樽商科大学が現在推進しており、オンラインとサテライト教室の学びを組み合わせたプログラムを提供する「北海道ユニバーサル・ユニバーシティ構想」について研究発表がありました。

澁川幸加会員（中央大学）からは、「通信制大学生の入学動機と年齢別の傾向」の題目で、通信制大学生への質問紙調査結果をもとにした年齢別の入学動機の特徴について研究発表がありました。

## 【シンポジウム】

シンポジウムは問題提起と討論の二部制で実施され、テーマは「過去と未来をつなぐ『通信制高校の現在地』—通信制高校の未来を見つめて」でした。コーディネータは井上宏宏会員（國學院大学兼任講師）が務め、シンポジストとして、田上英輔氏（神奈川県立横浜明朋高校総括教諭/元神奈川県立横浜修悠館高校副校長）、小椋龍郎氏（日々輝学園高

等学校 理事長・校長)、山口教雄氏 (学びリンク株式会社 社長) が登壇しました。

田上氏からは、「公立通信制高校の存在意義とは」と題し、公立通信制における教員数・支援部門職員数や活動率を向上する必要があるという課題、35 単位時間を保証するための事例紹介、これからの公立通信制高校の発展の方向として、通信制を不登校特例の拠点とし、全日・定時制との連携や全定通併修を用いる策について発表されました。

小椋氏からは、「生徒状況の変化に伴う、通信制高校の『役割』の変移の観点から」と題し、通信制高校の過去・現在・未来を概観する発表が行われました。具体的には、まず通信制高校の学校数・生徒数の変遷を示した後、これまでの通信制高校は学校教育のセーフティネットや多様な学びの提供をする役割であったが、今後は新しい学校教育観に基づくダイバーズラーニングを提供する場へと変容していく可能性について述べられました。

山口氏からは、近年の通信制高校の動向が示されました。具体的には、私立通信制併置校の拡大、全日制と通信制の生徒が交流できるような仕組みを持つ高校や、女子生徒にとって魅力的な教育内容・課程を編成する高校が増加していること、さらに、卒業時に進路未決定であった者が 2 年後・7 年後も一定数無職であるという調査結果から、卒業生支援や進路支援の重要性が述べられました。

発表後は質疑応答が行われ、通信制高校が<商品化>されていることへの認識や、公立通信制の生徒数が減少している要因、学びの多様化学校と通信制高校との違いなどについて参加者から多くの意見や質問が寄せられ、充実した議論が展開されました。

研究協議会当日は、予定されていた全プログラムを滞りなく終えることができました。また、会場をご提供いただいた桜美林大学および関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

澁川 幸加 (中央大学)



写真：会場の様子



写真：シンポジウム登壇者

## 開放制教育の原点 —村井実先生を敬慕して

顧問 白石 克己 (元・佛教学大学)

本学会の会長を務め、学会を改革した村井実元会長（慶應義塾大学名誉教授）が2024年10月18日、102歳の生涯を終え、帰天されました。学生以来、嚆矢に接してきた者として通信教育の理念となる開放制教育を提起したころの業績を紹介します（注）。

業績を身近に知ることができます。お手許に一冊でも講談社現代新書があったらその末尾を見てください。『講談社現代新書』刊行にあたって（1964）が載っています。著者は野間省一ですが、じつはその起草は村井先生です。冒頭にこうあります。

「教養は万人が身をもって養い創造すべきものであって、一部の専門家の占有物として、ただ一方的に人々の手もとに配布され伝達されるものではありません。」

講談社は戦前から「おもしろくて、ためになる」をキャッチフレーズに雑誌を出版してきました。戦後、自由な出版活動が可能になりましたが、先生は「ためになる」だけでよくわからない、わかったふりをせざるを得ない書物を批判していました。もちろん「おもしろい」だけの、娯楽を消費するだけの書物も批判していました。この考えと講談社の理念とが合致し、「現代新書」が生まれました。

教育と出版とはあまり関係がないようにも見えます。違います。戦前、学びたくとも入学できない学習者の独学を支援する、社会通信教育の『講義録』の事例があります。溯れば、江戸時代には『往来物』で学ぶことができました。

教育史を溯れば、17世紀にコメニウスは活版印刷が活発になる状況を踏まえ、「あらゆる人に、あらゆる事柄を」「わずかな労力で、愉快に、着実に」学べることをスローガンに『大教授学』を公刊しています。教科書を公刊すれば学校の生徒だけではなく、成人の生涯学習をも支援できると訴えました。この訴えは先の「刊行にあたって」の「万人に教養を」との主張に呼応します。

この後、先生は『原典による教育学の歩み』（講談社 1974）を編集し、各原典に対する解説を重ねます。この原典には先のコメニウスの他、教育史には載らない思想家の文章もあります。例えば、フランス文学のラブレーの原典を引き、全人的教養とそのユートピアの意義を説明しています。「テレームの僧院」の「汝の欲することをなせ」も引き、自由な学習を可能にする開放制の学習支援を説いています。

日本の原典もユニークです。石川啄木の小説『雲は天才である』を載せ、国民内部から近代学校への批判があった、学校が整えられても国家に奉仕するだけの閉鎖制教育の現実を指摘しています。この小説と対照的な、羽仁もと子が創立した自由学園の主張も収録しています。「徹底した子供の自由と生活の尊重」をしたいがために、あえて文部省認定の高等女学校として設立しなかった経緯を引いています。啄木と羽仁の訴えを介して、戦前の閉鎖制学校制度の現実とその制度への抵抗を解説しています。

先の「刊行にあたって」に戻りましょう。「万人」とともに「民衆」というキーワードが載っています。この「民衆」を村井先生は「国家に対する民」「政府に対する民」と説明しています。寄席の娯楽である講談を文字にした出版社の読者は、国民ではなく民衆です。開放制教育というのは、この民衆が知識であれ技術であれ、ものの感じ方・考え方であれ、自由な決定に委ねる学習支援です。児童・生徒・学生・教職員だけではなく、あらゆる人が「よく生きよう」とするために有用な知恵を届ける学習支援体制です。

この頃、先生は慶應義塾大学通信教育部長（1967年）となって「(仮称)放送大学」の計画に抗議していました。同じ時期、先生はNHKテレビで大学講座を担当し教育問題を講じ、私はその添削指導を受け持っていました。受講者はまさに民衆でした。旧漢字・旧仮名遣いの高齢者、ひらがなと誤字の多い高校生などのレポートに触れ、私は通信教育の重要性を認識しました。

この民衆の学びたい気持ちに応えるには、通信制の高校や大学、社会通信教育でも限界があります。遠隔教育を含む開放制の実現が要請されます。インターネットやYouTubeなどの活用は村井先生が説いた開放制教育を広げることができます。

（注）業績は『村井実著作集』（全8巻 小学館 1987～88）にある。私もこの編集委員であったが業績の一端しか収録できなかったの、会員向けの補完として執筆した。

## 令和6（2024）年度『研究論集』投稿募集

下記の通り、令和6（2024）年度『研究論集』への論文投稿について  
期限までに題目届を提出された会員の方は以下の規定を順守し期日までに原稿を事務局まで提出して下さい。

### (1) 題目届の提出

- ・提出方法：投稿を希望する会員は、下記期日までに題目等（①氏名、②所属、③題目）を事務局宛に電子メール（jade.office.1950@gmail.com）にてお知らせください。
- ・提出締切：2025年1月10日（金）

### (2) 原稿の提出

- ・提出方法：期日までに事務局宛に電子メール（jade.office.1950@gmail.com）にて提出して下さい。
- ・提出締切：2025年2月28日（金）

### (3) 刊行日（予定）

- ・2025年6月30日（月）

### (4) 留意点

- ・投稿に際しては、学会 WEB ページ掲載の「投稿原稿の執筆上の注意点」にある「投稿規定」「二重投稿の定義とその例外について」もご確認ください。

## 第5回研究交流集会の開催

日本通信教育学会では、通信教育に関連する特定テーマの検討、あるいは若手研究者の育成を目的とした研究促進のため、不定期で「研究交流集会」を開催しております。

今回は、2025年春に「越境する通信制大学～学びのゲームチェンジャー（仮）」の出版を予定する桜美林大学教育探究科学群教授の鈴木克夫氏（本学会会長）、京都大学大学院教育学研究科准教授の田口真奈氏、中央大学文学部特任助教の澁川幸加氏、神奈川工科大学教務課長の寺尾謙氏の4名によるパネルディスカッションを計画しております。

会員相互の交流ならびに親睦を深めていただくとともに、皆様に数多くご参加いただける機会となることを期待しております。

開催日時：2025年3月1日（土）

13:30～17:30 ※受付開始 13:00～ 終了後に情報交換会・会費制を予定

場 所：キャンパスプラザ京都 6階第5講習室

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町 939  
京都市営地下鉄烏丸線、近鉄京都線、JR 各線「京都駅」下車。徒歩5分。  
詳しくは、<https://www.consortium.or.jp/about-cp-kyoto/access/> を参照。

参加資格：なし（会員でない方も参加できます）

参加費：無料（情報交換会費は別途）

申込方法：日本通信教育学会ホームページにて受付予定（準備中）

申込締切：2025年2月20日（木） ※ただし、定員20名になり次第、締め切らせていただきます。

## 理事会報告

### 1. 2024年度第1回理事会報告

2024年度日本通信教育学会第1回理事会が、2024年7月1日（月）15時から16時30分にZoomによる発信・受信にて開催され、以下の事項が、審議、報告された。

【審議事項】

(1) 2023 年度事業報告（案）および決算報告（案）について

2023 年度事業報告（案）について説明があり、原案の通り承認された。また、2023 年度決算報告（案）について説明があり、ホームページ費用に係わる支払いの事実確認後、後日メール審議を行うこととなった。

(2) 2024 年度事業計画および 2024 年度予算（案）について

2024 年度予算（案）について説明があり、学会報製作費に係わる事実確認およびホームページ費用に係わる支払いの事実確認後、後日メール審議を行うこととなった。なお、2024 年度事業計画は 2023 年度第 3 回理事会にて承認済みである。

(3) 第 72 回研究協議会の開催について

第 72 回研究協議会の開催について説明があり、2024 年 11 月 2 日（土）に桜美林大学千駄ヶ谷キャンパスで開催することが決定された。実施方法については、鈴木会長、研究協議会担当の田島理事、事務局に一任されることとなった。

(4) 『令和 6 年度 研究論集』について

『令和 6 年度 研究論集』について説明があり、原案の通り承認された。

【報告事項】

なし

**2. 2024 年度第 2 回理事会報告**

2024 年度日本通信教育学会第 2 回理事会が、2024 年 9 月 24 日（火）17 時から 18 時 30 分に Zoom による発信・受信にて開催され、以下の事項が、審議、報告された。

【審議事項】

(1) 2023 年度決算報告（案）について

2023 年度決算報告（案）について監事より監査報告があり、原案の通り承認された。

(2) 第 72 回研究協議会の開催について

第 72 回研究協議会の開催について説明があり、原案の通り承認された。

(3) 次期役員改選について

鈴木会長より次期役員改選に関するこれまでの経緯の説明があり、その後、事務局より次期役員体制（案）を提示した。審議の結果、特段の意見は無く、全会一致で原案は承認された。

【報告事項】

なし

会 員

WEB版では省略いたします。

## 会員の声

### 通信制大学で行われる対面・非対面の教育

会員の皆様、はじめまして。大学院生の梅川紗綾と申します。私は私立大学で専任職員として三重県で勤務をしながら、社会人学生として学んでいます。通信制の桜美林大学大学院（修士課程）を修了し、その後、通学制の京都大学大学院（博士後期課程）に編入学し、現在もオンラインで研究指導や授業を受けています。

私はコロナ禍に大学職員としてメディア授業の実施支援を行ったことから、フルオンラインで行われるメディア授業に興味を持ちました。2020年から2024年まで大学職員としてLMSの管理や教員支援等、ICT活用教育に関する業務を行ってきたことから、当初はメディア授業の実施方法そのものに関心を持っていましたが、現在は大学教育全体の中で対面で行うこと、非対面で行うことをどのように使い分け、組み合わせていくべきかといったことに興味を持っています。通信制大学では新型コロナウイルス感染症が5類移行となった後もメディア授業の出席者数は増加を続け、メディア授業は通信制大学の中でも重要な授業方法の1つであると考えます。大学通信教育設置基準上のメディア授業の位置づけから通学不要で卒業が可能であり、教育の機会均等の一助となっている一方で、若年層の通信制大学生にとって対面して行う活動が果たす役割は大きいとも考えております。対面・非対面で行う教育活動を使い分けしている通信制大学は、大学教育の未来のあり方を示すのではと考え、研究に取り組んでいます。

本学会の論文誌を拝読し勉強させていただいたことや、桜美林大学のご縁から、通信教育に関する情報収集や皆様と交流させていただきながらぜひ勉強させていただきたいと考え、入会させていただきました。どうぞよろしく願いいたします。

（京都大学大学院教育学研究科 高等教育学コース 博士後期課程 梅川紗綾）

### 通信制高校の価値をさらに発信したい

皆さまはじめまして、この度団体会員として加盟させていただきました学びリンク株式会社と申します。1996年創立の通信制高校を中心テーマとした出版社です。

入会の動機は第72回研究協議会に参加させていただき、皆さまの長年の研究に基づいた深いご見識に触発されたことです。弊社の日々の活動では得られない視点や分析がたくさんあり目から鱗が落ちるようでした。

弊社は、①通信制高校進学ガイドブック等の出版、②通信制高校進学ガイダンス開催、③通信制高校向けシステム支援を主な事業として行っています。日常的にどっぷりと通信制高校関連の情報に浸かっているような状態ですが、目の前のことをなんとかこなしながら毎日を送っているのが実情です。

弊社は結果的にトライアンドエラーで事業を行ってきました。最初の通信制高校進学ガイドブックは詳細で読者に役立つものをとこの制作意図で始めましたが、学校紹介フォーマットが細かすぎて約85%から“取材拒否”を受けました。あまりの拒絶反応にやる気を失いそうでした。

通信制高校進学ガイダンスは始めて16年になりますが、最初は高校受験不合格でもまだ選択肢はあるという開催意図で合格発表会場に出向き願い叶わず不合格になった人を会場に連れて来るという方式でした。しかも、その日は大雪でとても少ない来場者でした。あまりの少なさに身も心も凍えそうでした。

それでも地道にやってこられたのは、読者や来場者の皆さまからの「役に立った、ありがとう」という温かい言葉でした。進学ガイドは全国の通信制高校を網羅できるようになりました。進学ガイダンスは年間約40回・約2万6千人の方が参加してくれるようになりました。

加盟させていただいたこれからは、皆さまの研究と今後の洞察を踏まえて通信制高校の価値をさらに発信していきたいと思っています。

（学びリンク株式会社 代表取締役 山口教雄）

「会員の声」を本誌に掲載します。掲載を希望する会員は、原稿（600～750字程度、MS-Wordで作成）を事務局（jade.office.1950@gmail.com）までお送りください。

## 通信教育の動向



## 全国高等学校通信制教育研究会

6月の全通研総会以降、11月中旬で各地区の研究協議会はすべて対面開催されました。各地区とも協議の中で活発な議論が交わされたと報告を受けています。8月には全通研研修会を開き、講師に早稲田大学 田中 博之教授に「生成AIを導入した指導上の工夫と留意点～高等学校の実践事例から～」と題した講演をいただきました。全日制高校の事例ではありましたが、AIの活用において、一般的な質問ではなく、具体的な形での質問こそがキーポイントであり、例えば原稿の推敲時に「この文の表現を別の言い回しで表現すると」のようにすると有効であると、アドバイスをいただきました。そのほか、小テストの作成や設問策定における選択肢の策定などにも使えるとのことでした。

各地区の研修会においても実験実習の在り方やその受講を促す工夫についての協議がありました。スクーリングの出席やレポートの提出管理についても一般的なソフトを使った実践事例も紹介され、学校独自に開発しなくてはと身構えていた教育のDX化についても可能性が見える発表がありました。

学会の研修会でも話題になりました「全日制に示されている1単位35単位時間分の指導」と同等の学習指導を通信制でどのように行っていくのかは、現場の課題であります。これまでは、生徒の習熟の遅れを理由に基礎基本を中心とした通信教育の展開で、発展的な内容や探求に当たる学習は生徒の自発的なものとして、放任してきた節があります。今後は「通信教育実施計画」という年間計画に、学習量という視点も盛り込んで策定されることが期待されます。この各科目の学習デザインを指導の教員も受講の生徒も十分に理解したうえで自主的な学習計画を立てさせ、支えていく指導を展開していきたいものです。  
(事務局長 小宮山 英明)



## 公益財団法人 私立大学通信教育協会

本協会は、通信教育課程を設置する私立大学相互の協力によって、大学通信教育の振興を図ることを目的に設立されており、現在、54校が加盟校となって運営し、大学通信教育の周知普及と水準向上の事業を推進しています。

## (1) 大学通信教育の周知普及事業

「令和6年秋期合同入学説明会」(8月、全国4都市)を開催しました。また、来年1～2月にも「令和7年春期合同入学説明会」(全国5都市、7日程)を実施する予定です。また大学通信教育の情報をHP以外にもYouTubeやInstagramで発信しています。

## (2) 大学通信教育の水準向上事業など

10月、職員の能力向上に資するため、「大学通信教育職員研修会」を1泊2日で開催しました。同研修会は、研修を通して職員としての資質の向上を図り、加盟校間の意見・情報交換を目的とするものです。

文部科学省の担当官の「障害のある学生の就学支援等について」の講演のあと、グループごとに分かれ、職員による活発なディスカッション、意見・情報交換が行われました。58名の参加がありました。

また、12月には、大学通信教育政策検討委員会のもと、「大学通信教育メディア授業研究会」をZOOMにて開催する予定です。「メディア授業とICT活用の進展のなかの教材・テキストの課題」をテーマに、玉川大学、京都芸術大学から事例報告を行い、その後グループに分かれてディスカッションを行います。41名が参加する予定です。

「LMS勉強会」もZOOMにて開催すると予定です。LMS事業者のユーザー会からの報告の後、事前アンケートでグループ分けした分科会で協議し、全体会としてそれぞれの分科会から報告を行います。

参加者は13名の予定です。活発な意見情報交換が期待されます。

なお、本協会では、令和7年度の正職員を募集しています。詳しくはHPをご覧ください。(理事長 高橋 陽一)



## 一般社団法人 日本通信教育振興協会

## (1) 文部科学大臣賞を受賞！

令和6年11月16日、第36回生涯学習奨励賞表彰式を開催いたしました。今年度の生涯学習奨励賞の表彰は、文部科学大臣賞6名、一般社団法人日本通信教育振興協会会長賞20名、総勢26名の方が受賞の栄に浴しました。この表彰は、当会認定の「生涯学習奨励講座」を特に優秀な成績で修了した者を対象に表彰するものです。

## (2) 全国の各地域で学習指導員が活動中です！

通信教育で学び、身に付けた知識や技能、また実社会で培った専門的な知識や技能を生かし、地域での生涯学習の支援者として活動する学習指導員が、自身の地域で教室を開講したり、公民館や生涯学習センターでの講師、小中学校での課外授業の支援など全国各地で活動中です。  
(事務局長 友縄 秀男)

「自分の研究や実践の支えとなるバイブル（聖書）のような本はありますか？」と聞かれたら、本稿を読んでくださっているみなさんの頭の中には、どんな本が浮かぶでしょうか。私がこの質問をされたならば、真っ先に頭に浮かぶのが今回紹介させていた「教材設計マニュアル」です。そして、この本との出会いがきっかけとなり、私は通信制高校の実践に熱中し、研究者としての道を歩み始めるようになりました。本稿では、この本の紹介よりも、この本を取り巻く私の周縁的なエピソードが多くなってしまいかも知れません。しかし、それらを通してこの本の魅力が少しでも伝わり、1人でも多くの方が手にとっていただけるきっかけとなれば幸いです。

私が「教材設計マニュアル」と出会ったのは、現在勤務する公立通信制高校に着任した2017年のことでした。多くの公立通信制高校教員がそうであるように、当時の私も過去に通信制での勤務経験はなく、通信教育の知識やスキルは皆無でした。着任当初は、それまで勤務していた全日制での経験が全く通用せず、自学自習が中心となる通信制の生徒の学びをどうやって支えていけばよいのだろうかと思悩む日々でした。そんなときに、職場の同僚であり、本学会の会員でもある石川伸明先生に紹介していただいたのがこの本でした。「たとえ数学が苦手な生徒でも、自宅で自分の力で学べるような教材を開発したい」、そんな思いでこの本を読み始めました。

「教材設計マニュアル」では、学習者が1時間程度の短時間で、独学で学べる紙教材の開発をゴールに解説が進められていきます。その中では、学習目標の明確化、3種類のテストの作成（前提・事前・事後）、課題分析、指導方略の策定、教材の形成的評価と改善など教材開発の基礎・基本となる内容が、実例を交えながら、丁寧かつ緻密な論理で解説されています。

インストラクショナルデザイン（ID）に基づいたシステムの教材開発のアプローチは、通信教育の経験がなく、指針を求める当時の私にとってぴったりの本でした。書かれている内容はどれも基本的な内容でも、「学習目標の明確化」というテーマ1つをとっても、例えば「二次方程式を理解する」という明確でない学習目標を設定した場合、（頭の中の変化ではなく）具体的に何ができるようになれば目標を達成したと判断できるのか、どのような

評価条件（何も見ないで、5分以内になど）や合格基準（全問正解など）でできるようになれば目標を達成した判断できるのか、といった問いを突きつけられ、通信制の自学自習の中では、生徒に教師が意図する学習目標を正確に認識させることでさえ容易でないと痛感しました。

「教材設計マニュアル」では、実際に教材を開発することを強く推奨しています。私も実際にこの本を参考に、まずは紙教材の作成に着手しました。全日制で勤務していた際に、講義や板書を行っても生徒に感謝されることはほとんどありませんでしたが、講義するなら話したい内容や板書で伝えたい内容盛り込んだ自作の通信教育用学習図書（学習書）を作成した際には、生徒から「教科書を読んでもわからなかったが、学習書のおかげで理解できるようになった」「学習書を何度も繰り返し読むことで、レポートの完成を自力ですることができた」など、感謝の言葉を伝えてもらうことが何度かありました。対面指導のようにリアルタイムで生徒の反応が得られるわけではない一方で、生徒の自宅での自学自習に思いを馳せ、どんなところでつまずくだろうかと出来る限りの想像力を働かせて作成した教材に、事後的にこういった反応が得られることは、通信教育の面白さと奥深さであるとしみじみと感じました。

その後、紙教材をPDF化し、動画教材も加えた学び直し可能なWeb教材を作成しました。Web教材の学び直しの要素として、生徒が理解できない内容に直面した際に、どの内容に戻ればいいのかを視覚的に自分で判断できるように、学習内容の「階層分析図」を作成しました。また、どこまで戻ればいいのかを自分で判断できるように「事前テスト」の作成も行いました。これらは「教材設計マニュアル」で扱われていた内容であり、Web教材を作成する際にも何度となくこの本を読み返しました。

「教材設計マニュアル」が書かれた当時から20年以上の歳月が経ち、時代も大きく変化しました。生成AIを活用したデジタル教材も珍しくなくなった現代でも、この本からは教材開発において必要で、普遍的な知見が数多く得られるのではないかと思います。通信教育で教材開発に取り組まれている方には、ぜひ手にとっていただきたい1冊です。

加藤圭太（早稲田大学大学院／愛知県立旭陵高等学校）